

◇夏の特別展「古代のおと—古を見る、古を聞く—」◇

宣長は耳の人、古典の研究は単なる文字の研究ではありません。『古事記』を正しく読み解くことができれば、古代の人々の声を聴くことができると考えていました。古の世界を見る・聴くことを試みた宣長の支えとなったのが、たくさんのノートたちです。好奇心のままに書き綴った少年期のノートから、執筆のためのデータベースまで。ノートには当時の宣長の関心や、悪戦苦闘の思考過程が隠されています。古代の声・音にまつわる資料と共に、丹念な筆跡で書かれた、少年期から円熟期までの宣長の、そして研究者たちのノートを一挙大公開です。

【期間】2019年6月12日（水）～9月8日（日）

【展示総数】80種100点（※予告なく変更の可能性があります）

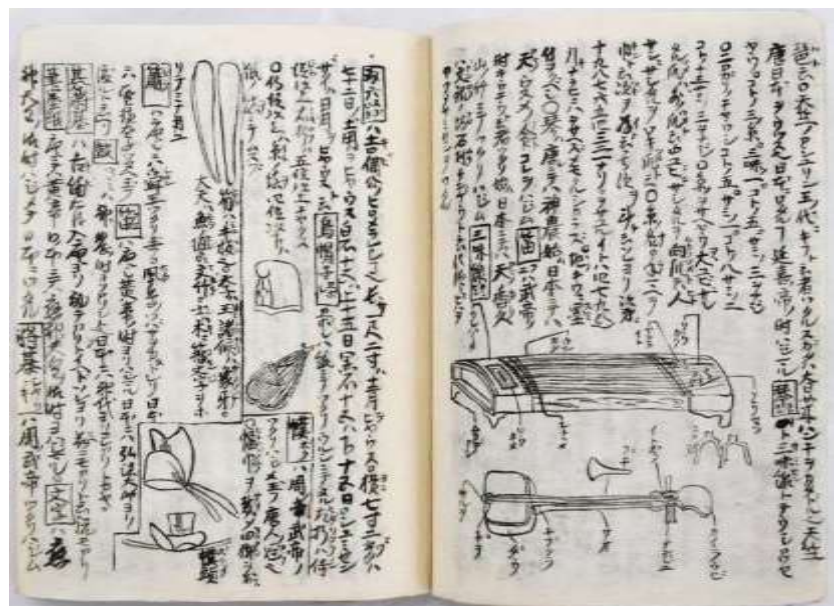
【展示説明会】6月15日（土）、7月20日（土）※いずれも午前11時から（無料）

★夏休み期間中随時展示説明を行います。受付までお申し出ください。

【主な展示品】

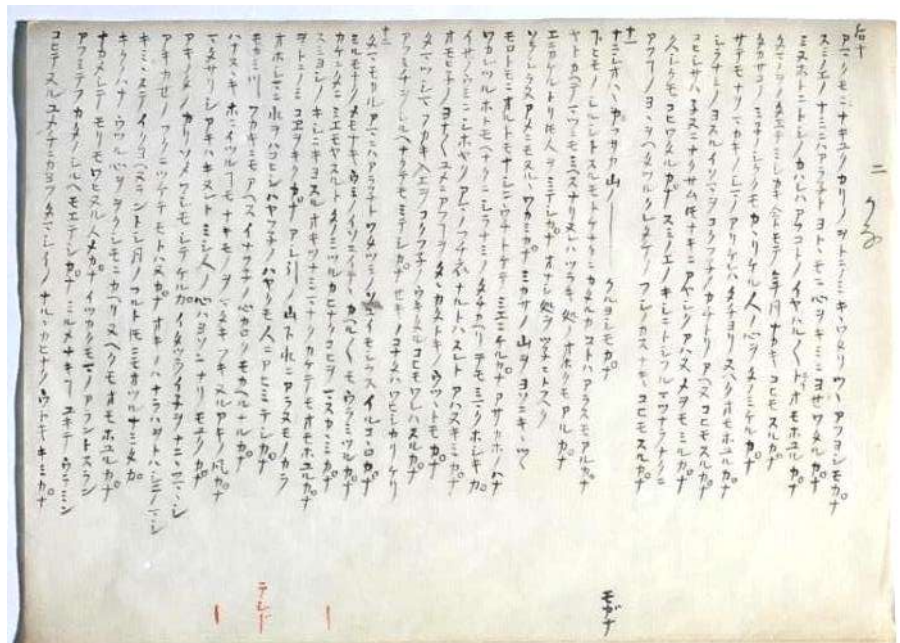
◎「事彙覧書」本居宣長筆

宣長が17、8歳の頃に書き始めたと考えられるノート。地理のこと、節気のこと、官職のこと、仏教のことなど関心のある内容をさまざまな書物から抜き出し、項目に分けて書いています。今回は「古代の音」にちなみ、器物の項目から楽器について書かれたページを展示します。



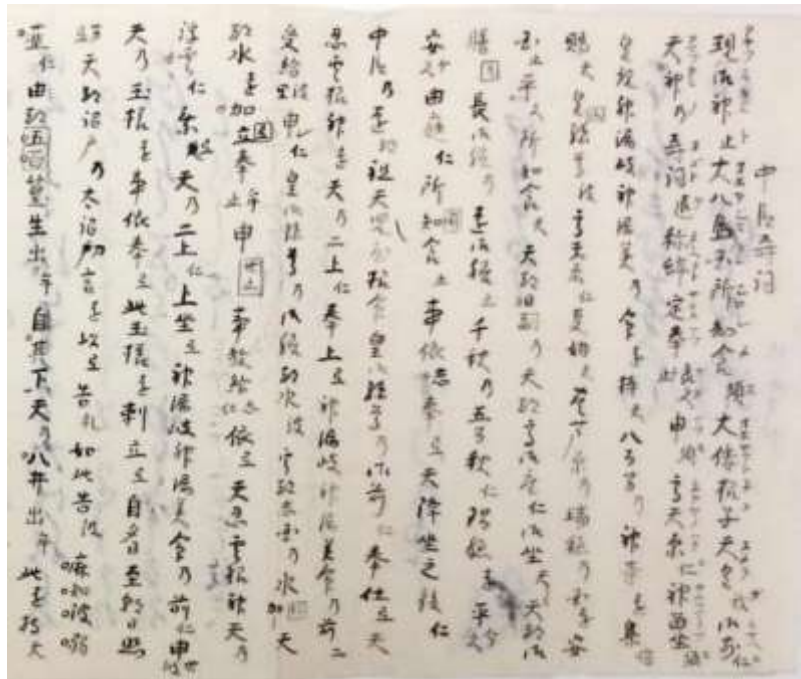
◎「詞の玉緒」草稿 本居宣長著

『詞の玉緒』は、いわゆる「係り結びの法則」について実例を挙げながら解説した著作です。今回は、その草稿(下書き)を展示します。実例を示すため、まず八代集など和歌集から同じ用例の歌を抜き出し、データベースを作るところからのスタートです。



◎「中臣寿詞」本居宣長筆

「中臣寿詞」（なかとみのよごと）は、天皇の即位後、初めて行う新嘗祭（いになめさい）である大嘗祭（だいじょうさい）の儀式で「即位された天皇の御代が長くお栄えになりますよう…」と中臣氏が申し上げる詞。宣長は、藤原頼長の『台記別記』に記されるこの詞が、祝詞の古い形を伝えていることを発見したのです。古代の言葉を知る資料となる『万葉集』では省略されることも多い「てにをは」は、祝詞や宣命に残されているとして、宣長は祝詞・宣命を重要視していました。（画像は一部）



★初出品「松園管弦会之序」本居清島詠

「松園(まつのその)」で、初めて管弦の演奏会が開かれたことを祝う文章です。松園の主人は歌を詠むなどの雅事を好む人で、あるとき本町の商人・中里常岳が笛の名手だと聞き、熱心にその指導を願ったといいます。そこへ次第に人が集まるようになり、笛、琵琶、琴などを習って、管弦の会を開くまでになったのです。今回はその内容と共に、清島の文字と軸の長さにも注目！ 途切れることなく、次へ次へと繋がっていくこの長さが、日本語の特徴なのかもしれません。

【伊藤宗壽氏寄贈】

(公益財団法人岡田文化財団 助成事業)

